

<連載> ともに 支えあって 生きる社会をめざして (4)

理事長 高見 優

「認知症の一人歩きが“当たり前”の地域づくり」



高齢協連合会主催の研修会(3/22)の講師・永田久美子さん(認知症介護研究・研修東京センター研究部長。三条市出身)のお話はとても参考になりました(いずれDVD教材として希望者に提供します)。標記のタイトルは高齢協連合会の方針であり、今回の永田さんのテーマでもあります。

「認知症」に対する今までのイメージは、「悪くなる一方」「その後の人生は真っ暗」と、本人も家族も絶望感にさいなまれるものでした。しかしそうではないのです! 絶望から希望へ、「わからない、できない」から「わかること、できることがある」へ、様々な打つ手がある、地域のつながり・理解・支援によって人生行路が大きく開けるものになってきているのです。

永田さんは、長年の実践と研究を通じてケアの在り方を振り返り、60年代精神病院で行われた「悪の3ロック」(拘束・薬・言葉による禁止)から、人間らしいケアを求める90年代の大転換を経て、介護の社会化～本人視点の重視～共生社会の実現へとつながる現在の状況は、これまでの60年間分の較差が混在していると指摘されました。その時々のお考え・やり方の影響が残っている状況を効果的に変えていくためには、認知症当事者本人の声を聴き、本人と一緒に暮らしと地域を創っている最先端のわかりやすい具体的な情報を、数多く伝えていくことが重要だと強調されました。

近年、本人たちが積極的に社会に向けて発言されるようになり、本人による著書の出版が相次いでいます。(藤田和子著「認知症になってもだいじょうぶ!」徳間書店・2017など)

「本人の声の中に、よりよい暮らし、よりよい支援の手がかりがある」(本当に必要なことは本人にしかわからない)、「声を聴こうとすること自体が、重要」(これを抜きにすると、本人が強い存在不安になり、状態が不安定に、そして本人も家族も関係者も苦しむ)……。認知症の母に接する私の対応の仕方も変わりました。

さまざまな事例紹介:(施設の外へ)外出は本人の気分転換だけでなく職員のストレス発散になり離職者が減った、本人がご近所の掃き掃除をし町内会から表彰された、本人が保育園で助っ人として働く(厚労省も認める)など利用者が稼げる事業所、スーパーへ買い出し、図書館に行く、居酒屋で仲間と飲む、洗車作業、高校野球部の部室清掃、犬の散歩仲間同士で「わんわんパトロール隊」を結成し地域の見守りをはじめ行方不明者を食い止めた・・・など多数の実践例が示されました。年間1万5千人が行方不明になる現代、警察の人たちも5年前とは大変化、街の商店、理美容店、新聞配達、宅配便も、小中学生も子どもころから認知症の新しい考え方を学んで、地域の中でやさしく支え合おう、と永田さんは訴えます。

「皆さんが温かく見守ってくれてるから、私は今日も元気です」(本人)

～私たちは、「その人に何が出来るか」ではなく、「その人と何が出来るか」と考えましょう、とも。

永田さんの報告と提起された考え方は、私たちさえあい生協がめざす地域づくりと共通すると思いました。

(ご感想・ご意見をお寄せください:編集部)